

## 8. ニシン<sup>りょう すいたい</sup>漁の衰退

明治30年(1897)まで順調に漁獲高<sup>めいじ じゅんちょう ぎょかくだか の</sup>を伸ばしてきたニシン漁<sup>りょう</sup>にも、停滞衰退<sup>ていたいすいたい</sup>(※52)の兆<sup>きざ</sup>し(※53)が見え始めます。

明治36年(1903)の約753,000トン<sup>めいじ やく</sup>をピークに漁獲高<sup>ぎょかくだか</sup>が減少<sup>げんしょう</sup>し始め、明治42年(1909)には半分以下<sup>い か やく</sup>の約333,000トンにまで減少<sup>げんしょう</sup>しました。

しかし、翌<sup>よく</sup>43年(1910)から大正の初め頃<sup>はじ ごろ</sup>までは豊漁<sup>ほうりょう</sup>となり、今までニシン漁<sup>りょう</sup>の主体<sup>しりべし</sup>となっていた後志地方<sup>しりべし</sup>とともに、増毛<sup>ましけ</sup>・留萌<sup>とままえ</sup>・苫前<sup>じゅうまう</sup>地方<sup>せいさんち</sup>が重要な生産地<sup>せいさんち</sup>となってきました。

大正8年(1919)以降<sup>いこう</sup>、少しずつ全道<sup>ぜんどう</sup>のニシン漁獲高<sup>ぎょかくだか</sup>に占める割合<sup>わりあい</sup>が高くなり、昭和<sup>しやうわ</sup>に入ってから<sup>やく</sup>は約40パーセント<sup>し</sup>を占めるようになります。

### ※52 停滞<sup>ていたいすいたい</sup>衰退

物事<sup>ものごと</sup>が調子<sup>ちようし</sup>よく進<sup>すす</sup>まないこと。勢<sup>いきお</sup>いを失<sup>うしな</sup>うこと。

### ※53 兆<sup>きざ</sup>し

物事<sup>ものごと</sup>が起<sup>おこ</sup>りそうな気配<sup>けはい</sup>。

めいじ おくしりとう  
 明治39年(1906)に、奥尻島へニシンが来なくなり、大正  
 くまいし まつまえ  
 6年(1917)に熊石、大正13年(1924)に松前、昭和7年(1932)  
 には積丹にもニシンが来なくなりました。大正9年(1920)  
 しゃこたん  
 の約731,000トン<sup>やく</sup>を最後に、ニシン<sup>さいご</sup>漁獲量<sup>ぎょかくりょう</sup>は年々減<sup>へ</sup>って  
 ったのです。

○全道のニシン<sup>ぎょかくりょう</sup>漁獲量<sup>すい</sup>の推移<sup>めいじ</sup>(明治20年~昭和30年)

